

授業研究

初学者を対象とした「静物描写」および「色彩構成」の課題の実践について

井 上 智 史

【要旨】「静物描写」「色彩構成」は美術・デザインの基本に関する学習であり、実技といえども、学習の量を重視するだけではなく、特に未経験者に対する指導方法とその学習効果に対しては検証が必要である。本授業研究では「デザイン基礎」の授業の実施について報告し、課題の実践と指導の効果について考察を行った。

【キーワード】デザイン教育 美術教育 静物描写 デッサン ドローイング 色彩構成

1. はじめに

美術やデザインの初学者に対し、基本的な実技トレーニングとしてデッサンや平面・立体構成といった課題が行われることが多い。美術大学の入学試験対策として予備校で行われる場合には、高校生は1日3時間、高校卒業生は1日6時間程を週6日、実技に費やすのが標準的だと思われる¹⁾。大学の授業としては、実技試験を合格した経験者に、基礎を深める目的で行われる授業と、実技試験が必ずしも必須ではない場合に、未経験者などに対して行われる授業に大別できるだろう²⁾。

大学で未経験者を対象に授業を行う場合、入学までに経験がある学生との差がある、課題数が限られる、それゆえ一つの課題が基本のすべてだと思ってしまう、基本的なトレーニングなのに「作品」を作った気になり満足してしまう、などが学生に対し考慮すべき点として考えられる。つまり、経験による差を短縮したり、予備校的な訓練とは異なる価値を示せる課題や、課題以外へも視野を向けてもらう工夫が、授業に求められるのである。

また、予備校であれ大学であれ、実技課題の指導としては、作業中には適度な時間間隔で口頭による個別指導を行う、作業後には各人の制作物を

一望できる状態で講評を行う、というのが一般的である。この方法は、学生自らの気づきや試行錯誤を重視できる反面、課題数が少ない場合には特に、指導を受ける体験が限られる、口頭による指導とその成果が記録されることも少なく、その効果を指導する側、指導を受ける側とも記憶しづらいという問題があるように思われる。

本授業研究では、そのような点を踏まえ、メディア情報学部1年生を対象に、今年度からの新カリキュラムの授業として、主に未経験者を想定して行った「デザイン基礎」について報告する。主となる「静物描写」および「色彩構成」の課題とその指導内容を中心に、制作の経過を記録する試みや、課題や指導の効果を少しでも増す工夫、技術力を向上させる訓練とは異なった視点の導入、について考察を行う。

2. 「静物描写」の課題について

2.1 課題の目的

デッサンをする目的は様々に考えられる。単純に、対象をありのままに描く技術や、絵を上手く描くための基本能力を高めることが目的の場合もあれば、「美術やデザインに必要なデッサン力を養うため」と説明を省略することも可能である。

一方で、スケッチやドローイングという言葉と併せて考えれば、観察する、描写するとは、「人間の身体の運動に根ざした原初的なもの」から「思考や感覚や感情を抽象的（非具象的）に描くという知性や理性に根ざしたこと」³⁾まで幅広い意味を含み、その目的は、観ること、描くことの意味そのものを探ることとなるだろう。そのような捉え方は、デザインを表面的な形象を操作する行為のみならず、思考や概念を組み立て表出させる行為と考える場合に、基礎的なトレーニングの目的としてより適しているように思われる。

今回は、未経験者対象の課題であるため、第一の目的は、観察し描写することを、まずは体験することとした。しかし、それだけでももったいないので、学生には、前述のような観察と描写の概念を実例と共に簡単に示し、観ること、描くこととはどういうことなのかを考えること、描くという観点から日常的にもの観るということを試みてみることも、大切な目的であると伝えた。

2.2 モチーフの選定

初学者は、立方体、円柱など単純な幾何形態や、それに近い静物の描写から学習を始めることが多いが、限られた課題数、もしくは体験を重視する場合には、幾何的要素を持ちつつ難しすぎず、また描いていて飽きのこないものが望ましい。今回は、白色のマグカップと、茶色のチェック模様の布を配付し、それに用意した松ぼっくりか持参の鉛筆を、各自で組み合わせてもらった（図1）。日常的なものであることがポイントであるが、比較的単色でまとまることも意識した。チェック模様の布にしたのは、無地の布だと奥行きなどが描きづらいためである。

2.3 途中経過の記録

この課題は、鉛筆による描写を授業3回にわたって行ってもらった。その間、学生の手作物は授業終了時に回収し、次の授業開始時に改めて配付した。各回の時点の手作物の状態を、デジタ



図1 静物描写のモチーフ

ルカメラで撮影しておくためである。単純な記録方法だが、このような描写課題で、途中経過を記録したという例は、あまりないように思われる。途中経過を記録することにより、幾つかの問題が改善されるのではないかと期待した。

描いたり消したりを繰り返していると、良くなっているのか、悪くなっているのか、分からなくなることがあるが、途中経過の写真があれば、客観的に振り返ることができる。期待したことの一つは、指導内容とその結果の確認や復習が、より効果的に行えるのではないかとということである。加えて期待したことは、講評時に途中経過も併せて提示できれば、他の学生の途中経過も目にするようになるため、擬似的な体験とまではいえないかもしれないが、一つの課題体験から得られる効果が、少しでも増すのではないかとということである。

以下、学生の手作物事例と共に検証してみたい。

2.4 制作と指導の事例1

図2は、静物描写の過程を、初学者なりに一通り体験できたと思われる事例である。

図2上段が、授業1回目の終了時である。輪郭のみでモチーフの形態を把握しようとする、机の上にモチーフが載っているように見えない（マグカップ上下の楕円形と、布の外形に矛盾が生じている）、という初学者によく見られる特徴が現れ

ている。輪郭だけではなく、明暗の関係を捉えることが大切だし、その方が形態も把握しやすい。この時点で行った指摘は、次の二点である。

1. 輪郭のみならず、垂直方向の明るさの關係に着目する。マグカップの内側の面、マグカップの手前の側面、マグカップと接する付近の布、布のさらに手前付近、計四点の明るさを比較し、その明暗の關係を描画に反映させてみる。

2. モチーフの端の部分に着目し比率を確かめる。マグカップの高さと上部楕円形の短軸と取手の高さとの比率、マグカップの上端や下端から取手の上端や下端までの比率、布の上端がマグカップを横切る位置と、そこからマグカップ上端・下端までの比率などの修正を試みしてみる。

図2中段は、その指摘より一週間後の状態である。全体的に明暗や形態の把握が進んでいることが見て取れる。ポイントを絞った観察によって、全体的な描画が向上した好例である。

図2下段は、さらに一週間後の一応の完成である。中段の時点では、マグカップに比して布にあまり手が入っていなかったため、マグカップと布の明るさの關係、布の中の明るさの關係も、チェック模様を利用しつつ把握してみよう、という指摘を行った結果、全体の明暗の把握が向上している。反面、中段の時点まではチェック模様を一連のものとして描けているのに、完成時には、個別の四角形に目がいってしまったためか、別個に描き、不自然に凹凸しているように見えている。また、明暗の把握は向上しているものの、全体的にはぼやけた印象になり、中段の時点でマグカップの取手部分や、松ぼっくりのかさの部分に見られたような、硬質な良い感じの筆致が薄れてしまった。

この事例においては、途中経過を記録することに期待した作用が、比較的分かりやすく現れたように思う。形態および明暗の把握が向上したことは一目瞭然であるし、講評時にも妥当な説得力を持ち、制作した本人、および他の学生にも説明することが可能だった。また、「最終的に良くなっ

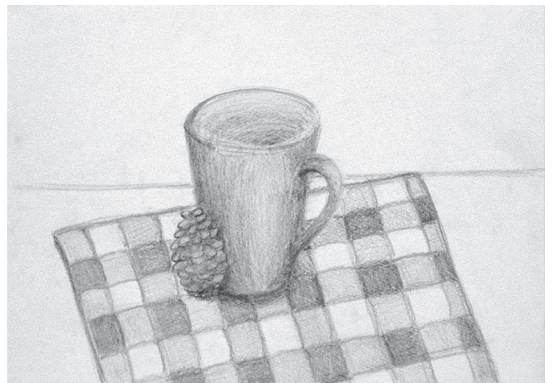
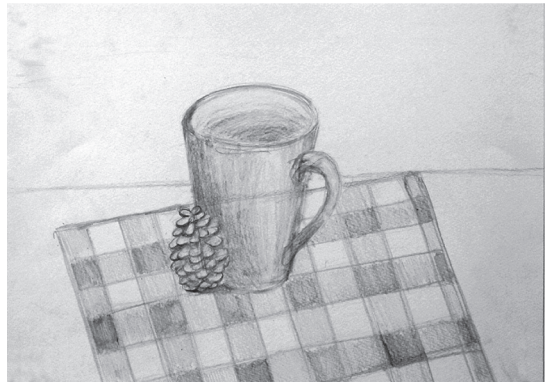
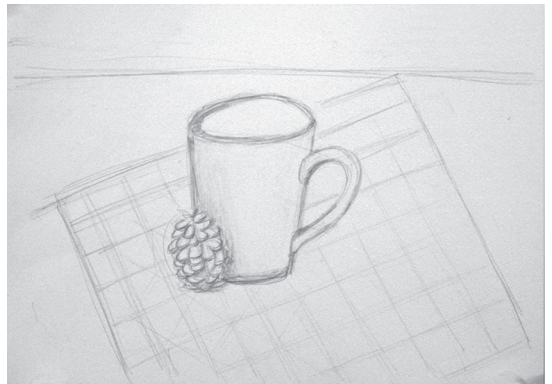


図2 静物描写 学生の制作例1

たけれども、中間段階での硬質な筆致も残せるとより良かった」という類の講評は、言葉だけよりも中段の図と下段の図を比較させた方が伝わりやすいだろうし、指導側としても、ある一つの側面を強調すると良さが失われるという反省を、具体的な事例とともに記憶することができた。

2.5 制作と指導の事例2

図3は、別の学生の事例である。上段が授業1回目の終了時だが、マグカップに比べ布の描写は進まず、あるはずの鉛筆が描かれていない。全体的にはではなく別個にモチーフを把握していく、描き方が分からないものはとりあえず描かない、という特徴も初学者にはよく見られる。

この時点で行った指摘は、次の二点である。

1. あるモチーフの端から他のモチーフの端まで、補助線のようなものを仮想し、その角度や、補助線がモチーフの外形とつくる多角形を想像し、実物と描写を比較し、形態を把握してみる。

2. その補助線とマグカップや布の間には空間があることを意識し、明暗を含むマグカップと布の関係や、布上の鉛筆を描くことを試みしてみる。

図3の中段は、その指摘より一週間後の状態である。あまり進んでいないが、補助線や布の対角線を手がかりに、形態を把握しようと試みた跡が残されている。結果として、マグカップと布の関係に改善が見られる。机の上にモチーフが載りつつあるし、布の外形が、上段では手前より奥が長いのに対し、中段ではより自然になり、チェック模様もより正確に捉えることができています。

図3下段が一応の完成の状態であるが、この事例においては、終盤で一氣に手が入ったため、その間の記録ができなかったのが惜しまれる。初学者にしては、布や鉛筆が自然に描かれているように見えるものの、指導した空間把握の方法と、描画結果に相関があるのか判断できなかった。図2の例と同じく講評の際には、質の向上を目で確認できたり、その経過を他の学生と共有できたりなど、途中経過を記録したことの効果はあったと感じたが、もう少し細やかに記録できれば、指導方法の妥当性が検証できただろう。

2.6 他者との比較

図2および図3の事例は、指導とその結果が、比較的良く現れた例である。講評時に、それぞれの学生（や他の学生）に、自分が受けた指導とは

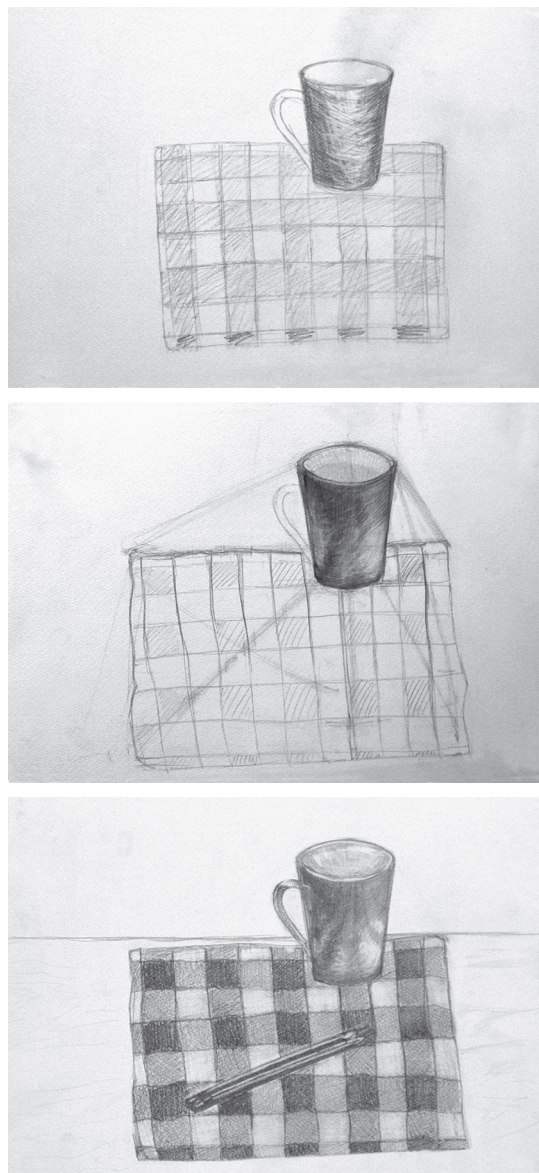


図3 静物描写 学生の制作例2

異なる指導方法とその結果を示すことができ、途中経過を記録した効果もあったように思う。

一方、指導が上手く作用しなかった例もある。図4の学生には、上図の状態で図2・図3の事例と同様の特徴が見られる。布に関しては、片隅からチェック模様の四角を描いており、一枚の布として意識できていない（マグカップ付近の円形

は、松ぼっくりの場所だと思われる)。従って、この学生にも前事例と同様の指摘を試みたが、図4中段、下段と、布だけを消し描き直そうとした結果、むしろ単純化されてしまい、全体的な形態や明暗の把握を試みるまでに至っていない。

全てを消して描き直すのも、初学者に見られる特徴だが、その方がむしろ難しいので、描き加えたり、修正したりしながら、形態や明暗を整えるよう促すことが多い。回数を重ねれば徐々に改善されるものなのだが、一度の課題機会においては、異なる指導方法を考える必要があるだろう。

それでも、図2・図3と図4を講評時に比較できたことには意味があったように思う。図4の制作者が、同レベルの初学者が同じ指摘を受けた結果としての図2・図3を見た上で、次にどのような手順で描写を行うか興味深い。今回、描写課題はこれだけのため、その効果を知ることはできないが、同種の機会があれば検証したいと思う。

2.7 まとめと今後に向けて

今まで例として挙げた指導方法は一般的なものであるが、その指導と併せ、制作の途中経過を記録することには、一定の効果があるだろう。

今回、デジタルカメラで撮影をただけでも、指導内容とその結果の対応を、指導側も学生側も確認しやすくなったし、後から振り返ることもできた。また、結果だけではなく、途中経過も併せ他人の制作物と比較することが、一つの課題の体験を増すことにつながったように思う。途中経過を相互に参照する方法をより検討することで、一つの課題が与える体験をより増やせる可能性があるのではないだろうか。

講評後、学生に書いてもらった感想にも、「最後にプロジェクターで3週間分の進化を見たときに、3週間でここまで変わるのかと驚きました」「みんなどんどんうまくなっていくのがプロジェクターでよくわかったのがとても見ていて楽しかった」などといった記述が多かった。

また意図しなかった良い効果としては、途中経

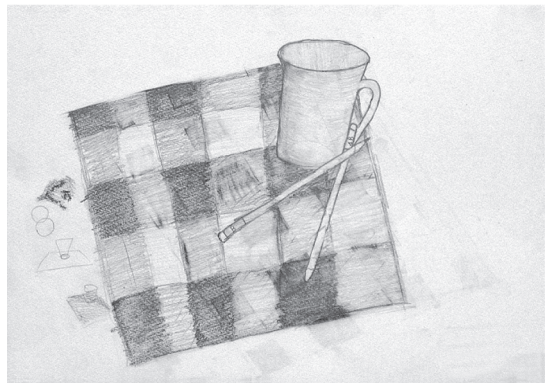
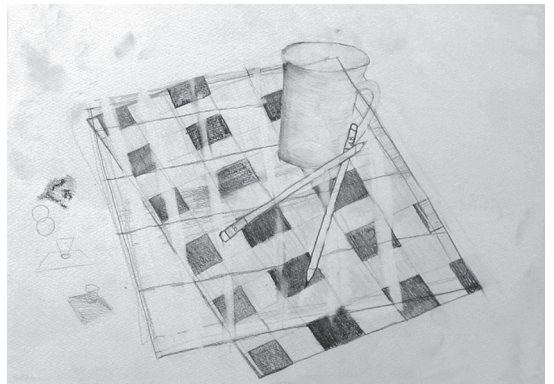
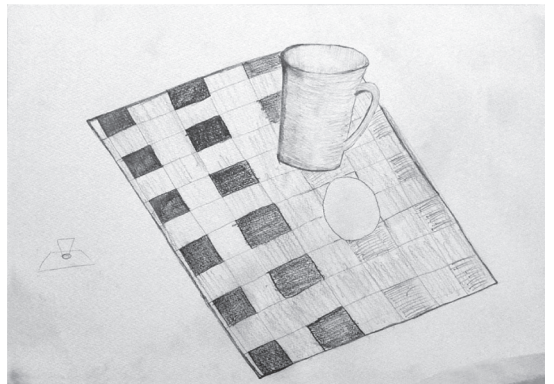


図4 静物描写 学生の制作例3

過を後から振り返り、他人と比較したことで、授業を欠席した際の進捗の遅れや、取り逃した学習量を学生が認識したことである。学生の感想に、出席回数による線の質の違いや、1回の出席の重要度に言及する記述が見受けられたのである。

逆に反省点は、個別に受けた指導と各自の途中経過の関係に関する感想が聞けなかったことであ

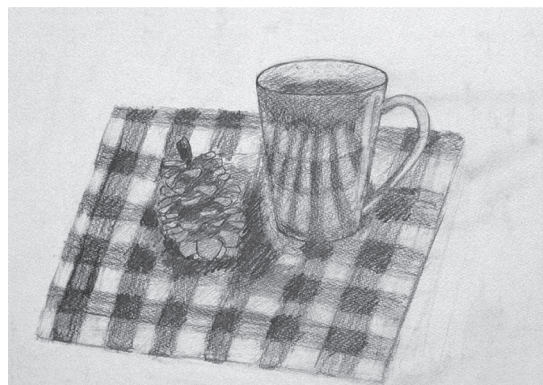


図5 異なる描画材による描写の比較1

図6 異なる描画材による描写の比較2

る。例えば、途中経過を制作中に随時参照できるようにした場合に、学習効果に差が出るのかなど、今後の検討課題である。

途中経過を記録するというのは、あまりこのような課題で試みられてこなかったように思う。しかしデジタルカメラなどが普及した今日においては、学生自らに撮影してもらうことも比較的容易かと思われる。自学などを促す場合でも、制作物だけを見るより途中経過も参照できれば、より細やかな指導が行える可能性があるだろう。今後、制作プロセスの記録と併せた実技課題の実施方法は、より検討される必要があると考えている。

2.8 異なる描画材による描写の比較

描写に関する課題の最後に、学生に観ることと描くこととの関係に、意識を向けてもらうために行った課題について簡単に記しておきたい。

鉛筆による静物描写の後、各自に好きな描画材を持参してもらい、同じモチーフを描写するということを試みた。

図5下段および図6下段は、その一例である。図5下段はおそらく墨汁で、図6下段はピンクのマニキュアで描かれている。図5、図6それぞれの上段が同じ学生の鉛筆による描写である。下段を描く際には、もちろん上段の絵を見て描いている訳ではないのだが、それぞれ、マグカップや布の形態および明暗の把握に、類似の傾向が見てとれるのが面白いところであろう。

このような比較は、観察と描写という行為が道具を用いた技術の問題ではなく、どのようにものを観ているか、という認識の問題であるということを示す好例だと思うのだがどうだろう。

今回、この比較については、細かく検証するには至っていない。しかし、観察と描写に関しての

多岐にわたる概念の一旦に、初学者でも触れることができる課題が考えられるように思う。これも今後検討すべきことの一つである。

3. 「色彩構成」の課題について

3.1 構成という概念

本授業において、「静物描写」と併せ主な課題としたのが「色彩構成」である。「静物描写」では、途中経過を記録することで、一つの課題の効果を増すことを試みたが、「色彩構成」では、試行錯誤しやすい作業内容とすることで、課題の効果を増すことを試みた。

初学者向けの構成と名のつく実技課題は、平面構成、立体構成などいくつかあるが、まず構成という概念が初学者にとっては難しい。簡単にいえば、形や色など造形の諸要素をバランス良く効果的に配置することなのだが、どのような状態をバランスが良い、あるいは効果的というかの理解がまた難しいのだ。それらは経験の中で学ぶしかないとされている風潮もあるように思われる。

また、日本のデザイン教育において構成には、Construction という意味と、形成、造形を意味する Gestaltung の訳語としての意味もあり⁴⁾、その本質的な理解を試みるのであれば、20 世紀初頭からの抽象絵画や構成主義に連なる系譜の作品群や、デザイン教育の流れを参照する必要がある。

美術大学受験の指南書⁵⁾などは、構成技法に関しては、課題制作を重ねる中で経験的に理解するものと割り切っているように思われる。例えば平面構成の課題では、まず、ある大きさの描画面面となる矩形を描く作業が求められ、その後、画面を分割したり、画面内に諸要素を配置するのが定番だが、画面を分割したり、画面の中に諸要素を収めること自体、ある程度の経験がないと難しいだろう。本質的理解を目指す場合には、点、線、面などの諸要素と、その分割、集積といった操作と効果から丹念に検証、学習する必要がある⁶⁾。

3.2 色彩を抽象的に扱うという概念

色を用いてイメージを表出するという概念もまた、初学者に伝えるのが難しい。あるテーマ、例えば暑い、冷たいを色で表現せよ、などは定番の課題であるのだが、炎や氷など具象的なものを描いてしまい、色でイメージを表出したことになっていない初学者の作品を、しばしば目にする。端的に言えば色を抽象的に扱えていないのだが、抽象もまた構成と同じく、その理解のために参照しなければならないことが多い。熱いを表現するのに炎を用いるということは、音楽に例えれば、雨を表現するのに雨音を用いるような短絡的な側面があるのだが、色や形の場合は目に見えるだけにむしろ難しいのかもしれない。

3.3 課題の目的

今回の課題では、色の配しかたによってイメージが生まれる、変わるということを視てみる、ということ一つの目的とした。これは「静物描写」の課題における、体験するという目的に相当する。その上で、構成するとはどのような行為か、色を抽象的に扱いイメージを表出させるとはどのような行為かを、各自が試行錯誤しながらできるだけ考えてみることを、を併せて目的とした。これは「静物描写」における、観察と描写とはどのような行為かを考えるという目的に相当する。

3.4 課題の概要

色彩構成には、絵の具を用いたり、色紙を用いたりすることが一般的であるが、今回は身の回りの印刷物を素材として用いることにした。

まず色彩構成の素材にすることを意識して色を採取してもらおう。雑誌のページやチラシ丸ごとでも良いし、切り抜きでも構わない。これは身の回りで使われている色も、造形の結果として配されていることを意識してもらおう意図がある（おそらく男性誌と女性誌からでは、採取できる色の傾向が異なるはずである）。続いて、色の体系を考える実習として、印刷物から採取した色を、明度、

彩度で分類してもらう。

それらを踏まえて、「甘い」「辛い」をテーマに、印刷物を素材にした色彩構成を行ってもらった。

作業手順としては、まず、印刷物からの切り抜きを、糊付けせずに A4 サイズの台紙上に並べる。その段階で切り抜く形や色、それらの組み合わせで、より甘い、より辛い形や色の配置、組み合わせを探る。同時に、中央を 120mm 四方の正方形にくり抜いた（穴をあけた）厚手の紙を配付し、台紙に重ね、正方形の穴から見える状態を確認する。厚手の紙は、つまりはトリミングをするための用紙であり、全体からどの部分をトリミングすると良く見えるか、つまりある範囲内の構成の良し悪しを、繰り返し、検討してもらうのである。

印刷物を素材にしたのは、色を抽象的に扱うということを考えてもらうためである。おそらく多くの印刷物には具象的な何か、写真や文字などが印刷されているはずであるが、その具象的なものを意識的に無視するよう試みさせることで、色の抽象的側面に着目させることを考えてみたのである。切り抜きを、最初は台紙上に移動できる状態で並べ、別の用紙でトリミングさせたのは、3.1 で述べたような、ある範囲内に諸要素を収めるという困難さを回避するためである。また、絵の具を用いたり、いきなり糊付けするより、一つの課題で試行錯誤できる回数が増え、課題の効果が増すのではないかと考えたからである。

最終的には、切り抜いた素材を台紙に糊付けし、制作物としてのトリミング範囲を決め（鉛筆で台紙に正方形を書かせ）、完成とさせた。

3.5 課題の評価

図7は、色彩構成の前段階の、印刷物から採取した色を、明度、彩度で分類する課題の事例である。縦軸に明度、横軸に彩度を取り、正しい序列になるように色を並べる（いわゆる等色相面を自作してもらう）。カラーで掲載できないが、明度の確認は、むしろモノクロームにした方が分かりやすい。講評時も、スキャニングした制作物を、



図7 印刷物から採取した色で作られた等色相面



図8 色彩構成「辛い」 学生の制作例1

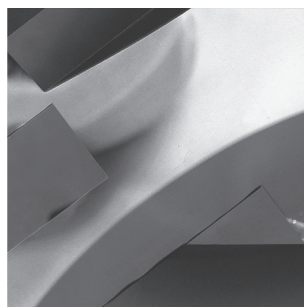


図9 図8と同じ制作物の異なるトリミング例

グレースケール化して見せることもあった。

学生の感想としては、「微妙な違いが分からず普段から色を見ていないことを認識した」「色のことを真剣に考えた」といった感想と併せ、楽しかったという類の、比較的肯定的な意見が多かった。この課題は単純作業を強いることになるかと予想していたため、むしろ意外であった。

図8は、印刷物を素材とした色彩構成の事例である。元となっている印刷物は料理雑誌の紙面である（料理が盛られた皿が90度回転させられ、背景的に用いられている）。紙面から具象的なイメージを剥ぎ、色を抽象的に扱おうと試みていることが伺え、ある程度、成功している。図8上段が台紙全体の状態で、下段が学生自身で決めたトリミング範囲だけの状態である。テーマとしての辛さがどの程度（どのように）表現されているかは、カラーでないと分かりづらいが、それでも、色や形を抽象的に構成しようと意図していることを感じるができるだろう。構成という概念を理解し始めていることが伺える。

また、同じ台紙の状態から、別の範囲をトリミングしてみたのが、図9である。一つの台紙から複数の範囲の構図やイメージの変化を確認できるのが、この課題のポイントである。

図10は、別の学生の事例（テーマは甘い）であるが、具象的な熊やハートマークが用いられ、抽象的な構成を考えるまでに至っていない（おそらく「甘い」を「かわいい」に引きよせて考え、構成を写真をデコレーションするスタンプのように捉えているのではない）。それでも、全く悪いというわけではない。図10が、学生が想定したトリミング状態であるが、図11は、同じ台紙から熊を消し（上から白い紙を貼っても良い）、一つの円の位置を変え、トリミング範囲を変えた状態である。このような状態を授業時間内に幾つか示す、という指導をした後、同じ学生が制作した「辛い」の色彩構成が、図12である。良いとまではいえないが、構成を指向できるようにはなっている。これも、一つの台紙から、複数の範囲の構



図10 色彩構成「甘い」 学生の制作例2



図11 図10と同じ制作物の異なるトリミング例



図12 図10と同じ学生による色彩構成「辛い」

図やイメージの変化を試行できることによる、指導の効果といえるだろう。

3.6 まとめと今後に向けて

図8、図10の二例は比較的成功した例である。例えば、切り抜きを初めから糊付してしまった結果、台紙上が無秩序な状態になり、構成の学習に至らなかった、どうしても具象的なイメージを用いることしかできず、色を抽象的に扱う学習に至らなかった、というのが主に上手くいかなかったケースである。今回以上に素材を並べ替えやすい仕組みを考えたり、色紙と印刷物を併用したり、実例を多く示すなど、改善を考える必要がある。また、講評においては、学生の制作物をスキャンし、画像編集ソフトウェアなどで、構成要素の位置や大きさを変えて、より良くしたものを見せる、ということも試みた。学生自身に行わせるには、ソフトウェアの習熟度に依存するという問題があるが、構成課題に特化したソフトウェアというものの可能性も考えられるように思う。

4. その他の授業内容について

これまで見てきたように、「デザイン基礎」の課題は「静物描写」「色彩構成」が主であるが、最後に、授業全体のスケジュールを付しておく。

第1回 ガイダンス

第2回 好きなデザインを持ちより発表する

第3回 鉛筆の使い方の実習

第4～6回 鉛筆による静物描写

第7回 色々な描画材による静物描写

第8回 前半の課題の講評とまとめ

第9回 色彩の基本（主に講義）

第10、11回 印刷物から採取した色の分類

第12～14回 印刷物を利用した色彩構成

第15回 学習計画のデザイン

後半の課題の講評とまとめ

第2回「好きなデザインを持ちより発表する」は自己紹介を兼ね実施した。デザインとは、制作

物を通じコミュニケーションをするための技術である、ということを早い段階で示すためだが、好きなデザインを通じて自己を紹介することは、その一歩となる。併せて、予想通り学生が持参したのは、物の外観に関するデザインが多かったが、それ以外に、デザインという言葉が使われる例（ライフスタイルデザインなど）を簡単に示し、デザインの対象の広がりの説明するきっかけとした。

授業第15回には、それ以前から課していた「学習計画のデザイン」を提出してもらった。デザインに関する職種などについて調べ、4年次までにポートフォリオを作ることを想定し、4年間の学習計画をデザインする。今回の授業に限るのではなく、先々まで取り組むものとしてデザインを考えて欲しいという意図がある。計画の出来は様々であったが、行わないよりは良かったと思う。反面、1、2年次までを静物描写に費やす、という計画をたてた学生もいた。本論冒頭で述べた一つの課題を重要視してしまう、という問題が見られてしまった例だと考えられる。今後の課題である。

注および参考文献

- 1) 予備校ごとに複数の受験対策コースがあるが、十数校の予備校の一般的なコース内容を参照。例えば、新宿美術学院、立川美術学院、武蔵野美術学院、彩光舎美術研究所など。
- 2) 美術大学、美術系の授業がある大学の十数校のシラバスを参照。例えば東京芸術大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学、東京造形大学、東京工科大学、明星大学、尚美学園大学など。
- 3) 樺山祐和「『見るところ』観察と描写」『造形基礎』武蔵野美術大学出版局 2002 p.36
- 4) 高橋正人『構成 1—視覚造形の基礎』ヴィジュアル・デザイン研究所編 鳳山社 1968 p.9
- 5) 「完習！色彩構成の基本」『芸大美大をめざす人へ』No.146 ハースト夫人画報社 2013 p.67
- 6) 山口正城、塚田敢『デザインの基礎』光生館 1960

On Still Life Drawing and Color Composition Assignments for the Novice
by INOUE Satoshi

[Abstract] Still life drawing and color composition are both areas of study that are closely connected to the fundamentals of art and design. While it is a practical skill, not only must an emphasis be put on the amount of study that goes into it, but teaching methods and learning effects for the inexperienced must be analyzed as well. This research includes a report on the implementation of the course, Design Fundamentals, and an examination of effects of practical assignments and instruction.

[Key Words] design education, art education, still life drawing, drawing, dessin, color composition